

Hem21 NEWS

公益財団法人
ひょうご震災記念21世紀研究機構
ニュース

「Hem21」は、ひょうご震災記念21世紀研究機構の英語表記である
Hyogo Earthquake Memorial 21st Century Research Instituteの略称です。

令和4年(2022) 3月

Vol.92

CONTENTS

- ①～② こころのケアシンポジウム
「コロナ禍のメンタルヘルスへの影響」を開催
- 研究戦略センター 自主研究プロジェクト
- ③ 「ソサエティ5.0に向けた制度設計-兵庫県政策課題-」について
- ④ 機構外部評価の概要
機構全体の評価と提言
- ⑤ HAT神戸掲示板
- ⑥～⑧ 人と防災未来センター
MiRAi

こころのケアシンポジウム 「コロナ禍のメンタルヘルスへの影響」を開催

兵庫県こころのケアセンターでは、令和3(2021)年12月2日(木)に、日頃の研究成果を発表するとともにパネルディスカッションを行いました。同センター会場の50人に加え、オンライン配信の併用により、合わせて約200人の方々に参加していただきました。

開会に当たり、加藤寛センター長が、シンポジウム開催の趣旨を含め、あいさつをしました。

その後、桃田茉莉主任研究員が、「PTSD症状を呈する対象者における日常生活上の実行機能の問題」についての研究報告を行いました。実行機能とは、目的を達成するために適切な行動の選択を可能にする能力のことです。今回の研究では、PTSD症状がある場合に物事への取り組みやパフォーマンスはどのような影響を受けるのか、トラウマ体験がある成人を対象に睡眠習慣や日常生活上の実行機能の関連について調査し、現状の分析と考察について報告しました。



パネルディスカッションでは、まず4人のパネリストから各テーマについての報告がありました。

田中恭子・国立成育医療研究センターこころの診療部
児童・思春期リエゾン診療科診療部長からは、「コロナ禍



を機に再考することのメンタルヘルスとその支援」をテーマに、教育・保健・療育・医療・福祉施設などの閉鎖が子どもの心身に影響を及ぼしている現状の説明や、同センター社会医学研究部・こころの診療部を中心とした研究者・医師有志で結成する「コロナ×こども本部」が実施した「コロナ×こどもアンケート」の調査報告がありました。また、コロナ禍における子どものトラウマ医療について何ができるのか、大人に求められる姿勢、心理支援の在り方などを述べられました。

続いて、当麻美樹・兵庫県立加古川医療センター副院長兼救急科部長から「新型コロナウイルス感染症患者受入病院におけるメンタルヘルス：アンケート調査からみえてきたことー現場の苦闘・組織の苦悩ー」をテーマに、感染症指定医療機関として、院内統一で取り組んだ感染対策や、第1波、第2波における問題点からみえてきたこと等について話がありました。また、同センターで働く全職員を対象に実施した「COVID-19対応に関するメンタルヘルス調査」の結果報告と、その結果から気付いたこととして、職員を守るために何が必要か、次なるパンデミックに備えて何が必要かなどについて述べられました。

さらに、原田奈穂子・宮崎大学医学部看護学科精神看護学領域教授からは、「最前線で働く保健医療従事者の質的研究について」をテーマに、コロナ禍の最前線で働く保健医療従事者＝フロントランナー（以下「FR」という。）の抱えるストレスや、そのストレスに対してどのような取り組みをしたかについての研究報告がありました。研究結果から、COVID-19がFRの仕事内容そのものを大きく変化させ、家族や職場への二次的影響を及ぼしていたことが明らかになったことや、FRは睡眠、食事、休息の必要性を感じているが、運営や管理側がセルフケアの重要性を認識し各個人がそれを実践できるような組織体制をつくらない限り、個人でのセルフケアの遂行は難しいことなどを述べられました。

そして、加藤寛センター長からは「コロナ禍における支援者のメンタルヘルスを考える」をテーマに、コロナ禍で従事したダイヤモンド・プリンセス号での支援活動報告や、コロナ禍における保健所の状況、保健師の苦悩などが報告されました。医療関係者や保健所の方たちが感じたストレスは災害時の惨事ストレスそのものであり、職場としてきちんと対策をとる必要があると話し、保健所の方たちの苦悩やさまざまな問題を認識し、社会が関心を払っていくことが大切であると結びました。

その後のディスカッションでは、「COVID-19に罹患した人のメンタルヘルスへの影響」と「第6波に向けての準備としてどのようなことができるか」について、ご意見等を伺いました。

田中診療部長からは、隔離病棟に子どもが一人で入院したことによる不安を和らげるためのオンライン面会の実施や、退院後に子どもがしっかり生活できるよう親自身がセルフケアをするためのリーフレットの作成、子ども自身にもセルフケアの方法を教えるなどの取り組みの紹介がありました。また、コロナ禍をばねにレジリエンスを高めるためには、自分たちがこれまで乗り越えてきたことに自信を持

ち、互いにねぎらい、いたわり、そして一致団結して第6波に向かうことが大切であり、新宿・歌舞伎町に集まる「トー横キッズ」のような居場所のない子どもたちが悪い大人にだまされるようなことがないよう、比較的余裕のある職種の大人が子どもたちに関心を寄せて積極的に関わっていくことが必要だと述べられました。

当麻副院長からは、救急センターでは意識のない患者に対してよりも、その家族にどのような対応がとれるか、リモート面会の形をとっているが画面だけでは伝わらない部分も多く、医療者と家族とのコミュニケーション不足により家族がフラストレーションをためてしまうという問題があるとの指摘がありました。第6波に向けては、今病院が持っているCOVID-19に対する抗体価で良しとせず、これまでの取り組みを踏まえつつ、新しいものを作っていくことが必要であることや、感染対応に関するシステムを職員が遵守して取り組んだことにより院内感染患者が出なかったという結果を誇りに、引き続きそれを遵守していくことが必要だと述べられました。

原田教授からは、地域性もあるが、最初の頃は石を投げられる家があったり、訪問看護の医療者が「（病気を）うつすから来るな」と言われて住民から石を投げられたりしたといった事例の紹介があり、みんなが心の余裕をなくしていると感じたとの話がありました。また、COVID-19は、等しく全ての人に影響を及ぼした事案と考えることができるからこそ、今後何が来ても、互いに責めるのではなく気遣いをし合う姿勢を持とうという心の準備をするのが今の時間ではないかと述べられました。

最後に、加藤センター長から、トラウマの観点から、多くの誹謗中傷を受けた方が支援を受けずにいることや、患者が亡くなった時にご遺族が当たり前の喪失感を持つことさえできなかったことが、今後の長いプロセスの中でどう影響していくのか危惧されるとの話がありました。加えて、第6波に向けて、医療・保健関係者は、できなかったことばかりに目を向けるのではなく、できたことを認識して評価することが大切であること、保健所の大変さを和らげるためには保健所だけでなく広く組織全体で対策を取る必要があること、支援者が元気でいることが基本となると結びました。

今回のシンポジウムでは、COVID-19の対応に関するメンタルヘルスについて、各研究結果や保健医療従事者の実情を知ることによって理解を深めることができ、医療・保健分野にとどまらず、社会全体での支援・努力が求められることを強く実感できる有意義なシンポジウムとなりました。



研究戦略センター 自主研究プロジェクト 「ソサエティ5.0に向けた制度設計—兵庫県の政策課題—」について

研究戦略センター研究調査部

研究戦略センターでは、これまで「人口減少、少子・高齢化社会におけるライフスタイルと社会保障のあり方～地域におけるクオリティ・オブ・ライフの実現に向けて～」(平成27(2015)～28(2016)年度)と「少子高齢化社会の制度設計～年齢で人生を区別しない社会並びに子供を生み育てやすい社会の実現に向けて」(同29(2017)～30(2018)年度)をテーマに研究に取り組みました。その中で兵庫県の喫緊の政策課題である少子高齢化に着目し、社会保障のあり方や年齢で区別しない社会並びに子供を生み育てやすい社会の制度設計について調査をしてきました。具体的には、出生率の低迷の要因、介護人材不足の対処、社会保障費と財政破綻、高齢者の労働力化、子育て支援の実態など、兵庫県が直面するさまざまな課題を理論・実証両面から検討し、新たな制度設計を提案しました。令和元(2019)年度から取り組む「ソサエティ5.0に向けた制度設計—兵庫県の政策課題—」(プロジェクトリーダー：阿部茂行・研究戦略センター参与)は、この延長線上に位置する研究プロジェクトです。

「ソサエティ5.0」は、日本が提唱する未来社会のコンセプトです。欧米のIndustry4.0を更に発展させ、AI・ロボット・IoTなど社会のあり方に影響を及ぼす新しい技術革新の進展のもと、経済発展と社会的課題の解決を両立させようというものです。フィジカル空間とサイバー空間を高い次元で融合させ、例えば遠隔医療により離島にいる患者の手術を都会にいる医師が執刀できる、そういう世の中がすぐそこまで来ています。体力のない高齢者にも、ロボットの助けを得て労働力として社会貢献をしてもらえます。全ての人が働く喜びを、そして健康で生き甲斐を感じる社会が実現できれば、医療費の削減や年金負担の軽減も将来的

に可能でしょう。

一方で、兵庫県の人口は長期的に減少する見込みであり、また地域統計の試算では令和2(2020)年後半以降、本県の生産性は持続的なマイナス局面に入ることが示されています。このため、経済成長を維持するには、向こう10年間において経済の技術革新力や労働生産性を高める施策が必要です。また、昨今のコロナ禍の影響を受け、社会はテレワークの導入、一極集中からの脱却等、大きく変わろうとしており、先を見通すことがますます難しくなっています。

こうしたことを背景に本研究会では、兵庫県の実態を精査し、ソサエティ5.0時代の社会経済の政策課題を取り上げ、教育の力点をどこに置き、誰がどこでどんな技術を使って働き、職住と子育ての問題をどうするのかなどについて、次のような視点から詳細なデータを収集・整理し、数量分析を中心に研究を進めています。

- AI、Robotの進展と失われる兵庫県の雇用
- 兵庫県における高齢者の健康と社会経済活動の可能性
- 就業年齢引き上げと社会参加活動の中高年の健康に及ぼす影響
- 日本の介護現場における外国人人材や中高年者の活用
- 世界に遅れをとるSTEM分野(Science、Technology、Engineering、Mathematics)への女性進学を促すジェンダーイノベーションの必要性
- 日本の保育政策の動向と兵庫県内の子育て支援施策
- 地域経済と不動産価格との関係

思いに色を、カタチを与える

写真集・詩集・自費出版の
お問い合わせは

神戸新聞総合印刷
神戸新聞総合出版センター

<https://www.kobenp-printing.co.jp/>

機構外部評価の概要

本年度の外部評価は、第4期中期目標・計画（計画期間：平成30(2018)～令和3(2021)年度）に基づき、研究戦略センター（研究調査部、学術交流部）及び管理部の各組織が、事業全般について適正に実施しているかを点検した上で、組織別に評価を行うとともに、人と防災未来セ

ンター及びこころのケアセンターでも行われた外部評価の結果も踏まえて、機構全体の評価も行いました。

報告書の概要は以下のとおりで、全文は当機構のホームページに掲載しています。

機構全体の評価と提言

研究調査部は、国難ともなりうる巨大災害（南海トラフ地震）に備えた自主研究を進め、その研究成果を一般書籍化するとともに、復興庁からの東日本大震災復興などの研究を受託するなど、時代潮流に即して政策研究を行っており、社会的評価も高い。

学術交流部は、被災地のシンクタンクとして、防災・復興をテーマに「21世紀文明シンポジウム」、「自治体災害対策全国会議」などを開催し、コロナ禍におけるオンライン配信の活用やマスメディアとの連携にも取り組み、全国に情報を発信している。

人と防災未来センターは、新型コロナウイルス感染症拡大による来館者減少の中で、その対策を徹底しながら来館者の安全安心の確保に努めており、またオンラインによる来館者増加への努力も見られる。研究調査を実践につなげ、その実践結果に基づき研究を行い、さらにその成果で人材育成を行っている。

こころのケアセンターは、感染対策を徹底しつつトラウマ・PTSDに関する研究、研修、情報発信、連携・交流、相談・診療の5つの機能を発揮している。土曜日に開庁していることの意義は大きく、学生、勤労者の相談件数が増加していることは評価に値する。

機構全体として、その使命を果たすため、年々着実に各々の機能の充実に努め、地域社会の期待に応えてきたと評価できるが、次期中期計画（計画期間：令和4～7年度）の策定年度に当たっていることも踏まえ、さらなる機能拡充と発展に向けて新たな展開も期待して、以下の提言を行う。

(1)「安全安心なまちづくり」と「共生社会の実現」の研究の一歩化

「安全安心なまちづくり」と「共生社会の実現」は、個中心主義のもつ欠陥を是正し、人間同士が支え合う、平和で豊かな共生社会の実現がなければ安全安心な社会は実現できない一体の関係であるという当初の理念に立ち返って課題に取り組むべきである。双方に関連したテーマで研究を一本化するの望ましい。

(2)ウィズコロナ社会・ポストコロナ社会に向けた研究・調査への取り組み

防疫・感染防止は、医療衛生分野の役割であるが、パンデミックが社会と人々の暮らしにどのように影響し、社会やコミュニティ、自治体のあり方や強靱化はどうあるべきかは、今後機構が研究調査を行うのに値するテーマである。防災やこころのケア問題を含めた諸課題について研究し、広く発信することを期待する。

(3)発信力強化を通じた社会的貢献の促進

ウィズコロナ社会・ポストコロナ社会の諸課題を広く発信していく必要がある。「ひょうご講座」などのリカレント教育や「21世紀ひょうご」などの情報誌・ホームページ等の充実と普及、またオンライン配信など新たな手法を組み入れたハイブリッドな取り組み、さらに大手メディアの活用や多様な研究機関・団体などと連携した発信力のさらなる強化に取り組まれない。



外部評価委員

委員長

片山 裕（神戸大学名誉教授）

委員

足立 泰美（甲南大学経済学部教授）

木村 陽子（奈良県立大学理事）

小池 洋次（関西学院大学フェロー）

瀧川 博司（神戸商工会議所名誉議員）

泊 次郎（元朝日新聞編集委員）

豊田 奈穂（関東学院大学経済学部講師）

〔委員：50音順〕

HAT神戸 掲示板

兵庫県立美術館

特別展

「ミニマル/コンセプチュアル:ドロテ&コンラート・フィッシャーと1960-70年代美術」

ミニマル・アートは、主に1960年代のアメリカで展開した美術の潮流です。作家の手仕事やその痕跡を廃し、工業用素材や既製品を用いて、単純で幾何学的な形やその反復から成る作品を制作しました。ミニマル・アートに続いて現れ、同時代に国際的な広がりを見せたコンセプチュアル・アートは、物質的な制作物以上に、その元となるコンセプトやアイデアを重視します。特定の形式に縛られることなく、言葉や印刷物、日用品、作家自身の行為、それを記録する写真や映像など、多様な媒体が用いられました。

ドロテ&コンラート・フィッシャー夫妻は、1967年にデュッセルドルフにギャラリーを開き、こうした同時代の国際的な動向をいち早く紹介しました。フィッシャー夫妻は展覧会を手掛けた作家たちの作品を収集すると共に、その制作過程に関わる書簡や指示書、ドローイングといった多彩な資料も保管していました。

本展は、故フィッシャー夫妻のコレクションを収蔵したノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館の全面的な協力のもと、フィッシャー夫妻旧蔵の貴重な作品と資料、ならびに日本国内に所蔵される主要作品を通じて、今日のアートに大きな影響を与えたこの二つの芸術動向を振り返ります。

■会 期＝3月26日(土)～5月29日(日)

■観覧料＝一般1,600円、大学生1,200円、70歳以上800円、高校生以下無料

◎休 館 日＝月曜日

◎開館時間＝10時～18時 ※入場は閉館の30分前まで

※展覧会についての詳細は兵庫県立美術館ホームページ(<https://www.artm.pref.hyogo.jp/>)にてご確認ください

◎問い合わせ

TEL 078-262-1011



①



②

①ドロテ・フィッシャーとコンラート・フィッシャー 1969年 Photo: Gerhard Richter

②ギルバート&ジョージ《アーチの下で(ボックス)》
1969年 ノルトライン＝ヴェストファーレン州立美術館

©2021 Gilbert & George; Foto: Achim Kukulies, Düsseldorf

JICA関西

◆食べることから始める国際協力！

JICA関西食堂の月替わりエスニック料理

JICA関西1階の食堂(カフェテリア方式)は、どなたでもご利用できます。完全禁煙で、安心して料理を楽しめ、子供椅子もご用意していますので、お客様連れも歓迎です。月替わりエスニック料理もご好評いただいております！3月のエスニック料理は「ガーナ」です。また、4月は「2021年度の月替わりエスニック人気投票」で1位を獲得したエスニック料理をお届けします。お楽しみに！



写真はガーナ料理

月替わりエスニック料理の詳細と写真はこちら→

JICA関西食堂

<https://www.jica.go.jp/kansai/office/restaurant/index.html>■営業時間＝(昼)11時半から14時まで(夜)17時半から20時まで
※各終了30分前ラストオーダー

コロナの状況を踏まえて営業時間に変更になる可能性があります。

■定 休 日＝年中無休(年末年始を除く。)

(注)詳しい休業日についてはJICA関西ホームページをご確認いただくか、下記までお問い合わせください。

◎問い合わせ

JICA関西(独立行政法人国際協力機構関西センター)総務課

TEL 078-261-0341 FAX 078-261-0342

Eメール jicaksic-event@jica.go.jp

その他、詳細はJICA関西ホームページをチェック！

→ <https://www.jica.go.jp/kansai/>

日本赤十字社 兵庫県支部

国内外救護活動、医療、献血、ボランティアなど、さまざまな“苦しんでいる人を救う事業”を支える赤十字の事務系職員を、令和5(2023)年度4月採用に向けて募集します。

募集期間＝令和4年4月1日～5月10日

募集職種＝総合(事務)職

応募資格＝①平成4(1992)年4月2日以降に生まれた方で、4年制大学、短期大学、専門学校、高等学校のいずれかを卒業または令和5(2023)年3月卒業見込みの方。

ただし、高等学校卒業の場合は、既卒者に限ります。

②普通自動車第一種運転免許を取得している方、または令和5年3月末までに取得見込みの方。

勤務場所＝兵庫県内の赤十字施設(兵庫県支部、姫路赤十字病院、多可赤十字病院、神戸赤十字病院、兵庫県赤十字血液センター)

詳しい募集要項は、日本赤十字社兵庫県支部ホームページ(<http://www.hyogo.jrc.or.jp/>)をご覧ください。



◎問い合わせ

総務課

TEL 078-241-9889

赤十字 兵庫 検索

日本赤十字社 兵庫県支部
Japanese Red Cross Society

「第26回減災報道研究会」を開催しました

人と防災未来センターでは、令和3(2021)年12月23日(木)、報道関係者、自治体職員、研究者等60人の参加による「第26回減災報道研究会」をリアルタイムで配信する形で開催しました。

近年、安否不明者等の氏名公表の重要性について改めて議論される中で、熱海土石流災害を契機に静岡県が「災害時における被災者の氏名等公表方針」を策定したことを踏まえ、今回のテーマを「多面的な視点で見る災害時安否不明者の氏名公表」とし、講演会とパネルディスカッションを開催しました。

初めに、杉山隆通氏(静岡県危機管理監代理兼危機報道官)から、「災害時における被災者の氏名等公表方針～熱海土石流災害の経験を踏まえて～」と題して、静岡県が策定した安否不明者の48時間以内氏名等公表方針についての解説と課題の提起がありました。続いて、岡本正氏(銀座パートナーズ法律事務所弁護士・岩手大学地域防災研究センター客員教授)から、「安否情報と個人情報保護法制～個人情報は個人を救うためにある～」と題して、災害と個人情報をめぐる政策上の課題について解説がありました。



その後、講師2人に大前琢郎氏(堺市危機管理室危機管理課長)と川西勝氏(読売新聞大阪本社編集委員)、福本晋悟氏(毎日放送総合編成局アナウンスセンターアナウンサー)、河田慈人主任研究員を交えて、これからの「災害時安否不明者の氏名公表」について、オンラインでの参加者から出された質問にも答えながらパネルディスカッションを行いました。

「国際防災・人道支援フォーラム2022」を開催しました

人と防災未来センターでは、令和4(2022)年1月26日(水)、「防災・災害情報と避難～地球温暖化への適応～」をテーマに「国際防災・人道支援フォーラム2022」を開催。今回は新型コロナウイルス感染状況を鑑み、完全オンラインで実施しました。

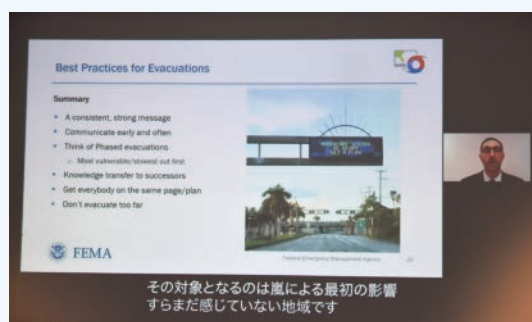
基調講演では、中北英一・京都大学防災研究所長から「水災害への気候変動影響と適応」をテーマに激甚化する気象関連災害に適応することの重要性を、また、ブランドン・ボリンスキー・アメリカ合衆国連邦緊急事態管理庁(FEMA)リージョン4ハリケーンプログラム・マネージャーから「ハリケーンからの避難」をテーマに連邦政府による支援や成功事例をお話いただきました。

続いて、パネルディスカッションを行い、河田恵昭・人と防災未来センター長をファシリテーターに、パネリストには

基調講演のお二人と、片田敏孝・東京大学大学院情報学環特任教授、矢守克也・京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授、木俣昌久・気象庁気象防災監、FEMAのジョリーン・ジュベラ・危機管理専門官、マニー・トロ・リージョン4応急対応部長をお迎えし、激甚化する災害への対応や避難情報をどう伝えていけば住民の避難行動に結び付くのかなどについて議論しました。

最後に、河田センター長が「地球温暖化に伴う気候変動は世界共通の問題。私たちが努力して被害軽減につなげるようにしていきたい」と総括しました。

なお、フォーラムの録画配信を、当センターのホームページ(<https://www.dri.ne.jp/pickup/forum/forum2022/>)から視聴いただけます。ぜひご覧ください。



令和3年度1.17防災未来賞 「ぼうさい甲子園」表彰校・団体決まる

当機構が、兵庫県、毎日新聞社と共催し、学校や地域で取り組む、先進的な防災教育や防災活動を顕彰する1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」の表彰式を、令和4(2022)年1月9日(日)に兵庫県公館で開催しました。新型コロナウイルス感染症の拡大の状況に鑑み、オンラインでの開催とし、例年表彰式と同時に実施する発表会は、残念ながら中止としました。

なお、兵庫県内の小、中、高校生を対象に行われた「防災力強化県民運動ポスターコンクール」の表彰式については、例年同様、ぼうさい甲子園表彰式に併せて開催されました。

さて、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症に対する取り組みを対象活動に加えた今回の「ぼうさい甲子園」は、全国各地から110校・団体の応募があり、各部門の「ぼうさい大賞」「優秀賞」「奨励賞」に加え、特別賞とし

て「URレジリエンス賞」、「はばタン賞」、「だいじょうぶ賞」、「フロンティア賞」、「継続こそ力賞」、「しなやかwithコロナ賞」を選考し、計64校・団体が受賞されました。

各部門の「ぼうさい大賞」受賞団体から1団体に贈られるグランプリに選ばれたのは、「高校生の部」の「和歌山県立和歌山商業高等学校」です。

この学校では、商業専門科目「電子商取引」の学習の中で、4年前から継続して「南海トラフ地震に対する防災・減災」をテーマに取り組まれています。毎年の成果をウェブページやYouTubeを活用して翌年度に共有しながら、着実に防災教育を進め、このぼうさい甲子園には今回、初応募で見事グランプリに輝きました。

なお、受賞校の取り組みは、特設ウェブサイト(<http://bousai-koushien.net/>)でご紹介しています。ぜひご覧ください。

賞名	部門	都道府県	校・団体名
◆グランプリ	高校生部門	【和歌山県】	和歌山県立和歌山商業高等学校
◆ぼうさい大賞	小学生部門	【徳島県】	阿南市立津乃峰小学校
	中学生部門	【宮城県】	気仙沼市立鹿折中学校
	大学生部門	【愛媛県】	愛媛大学防災リーダークラブ
	特別支援学校・団体部門	【埼玉県】	埼玉県立日高特別支援学校



(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸1-5-2

観覧案内・予約 / TEL 078-262-5050 <https://www.dri.ne.jp/>

開館時間 9時30分～17時30分(入館は16時30分まで)
※7月～9月は9時30分～18時(入館は17時まで)
※金曜、土曜は9時30分～19時(入館は18時まで)

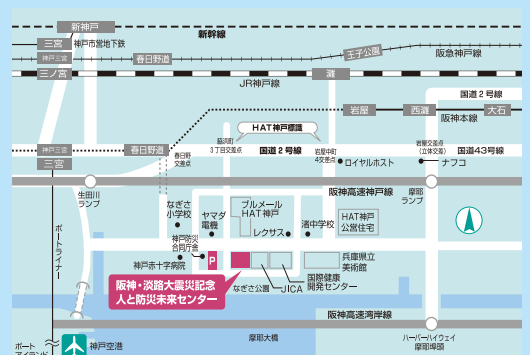
入館料金 大人: 600円(450円) 大学生: 450円(350円)
東館のみ観覧の場合
大人: 300円(200円) 大学生: 200円(150円)
高校生・中学生・小学生: 無料
※()内は20名以上の団体料金
※障がい者、70歳以上の高齢者割引有
※毎月17日は、入館無料
(17日が休館日の場合は、翌18日となります)

休館日 毎週月曜(月曜が祝日の場合は翌平日)、12月31日と1月1日
※ゴールデンウィーク期間中(4月29日から5月5日まで)は無休
※資料室の開室日についてはホームページでご確認ください

交通

- 鉄道**
- ・阪神電鉄「岩屋」駅、「春日野道」駅から徒歩約10分
 - ・JR「灘」駅南口から徒歩12分
 - ・阪急電鉄「王子公園」駅西口から徒歩約20分
- バス**
- ・三宮駅前から約15分
 - ・阪神高速道路神戸線「生田川」ランプから約8分
 - ・阪神高速道路神戸線「摩耶」ランプから約4分
 - ・阪急・阪神・JR「三宮」駅から約10分

●有料駐車場あり ●バス待機所(予約制/無料)あり



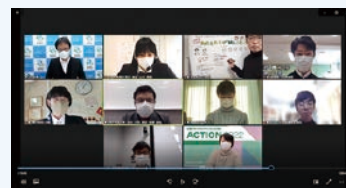
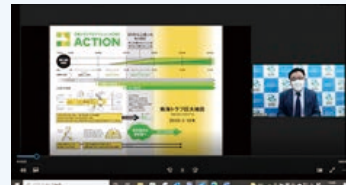
「災害メモリアルアクションKOBÉ2022」 活動報告会を開催しました

人と防災未来センターでは、令和4(2022)年1月8日(土)、「災害メモリアルアクションKOBÉ2022」の活動報告会を開催しました。阪神・淡路大震災から27年目となる今年も、昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症の急拡大を受け完全オンラインで実施しました。

兵庫県立舞子高等学校、兵庫県立明石南高等学校、滋賀県立彦根東高等学校、国立明石工業高等専門学校(開発チーム、地域連携チーム)、神戸学院大学(現代社会学部、クローズアップ社会研究会)、関西大学、兵庫県立大学防災リーダープログラムチームの9チームによる活動発表とポスター掲示をした後、「わたしたちが『聴く』ことって…」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

パネルディスカッションは、各校1名ずつが参加しました。コーディネーターである中野元太・京都大学防災研究所助教と林田怜菜・人と防災未来センター研究員からは、これまでのいろいろな活動を通して「聴いて心に響いたこと」や「活動に対する思いを色にたとえたら何色か」といった質問を投げ掛けられました。学生が災害・防災に対して印象に残っている色彩は、白など大人が考えるような色とは違うことがあるのだと気付かされました。また、互いにこれまでの思い出を話すなど、皆で取り組みを振り返るパネルディスカッションになりました。

今回は、オンライン画面上で互いの顔を眺めながらの参加形態でしたが、現代っ子らしく映像を楽しみながら和気あいあいとした雰囲気の中、学生同士の交流も図られ、有意義な時間となりました。



企画展「日本災害伝承ミュージアムマップ」を開催中

災害伝承について学び、考える機会としていただくため、手持ちのスマートフォンを使ってAR表示で全国の災害伝承ミュージアムの施設情報をご覧いただける大型日本全図マップの展示等を行っています。近年、日本で起きた災害についても改めて知ることができます。この機会にぜひご来訪ください。

<開催期間> 令和4年1月12日(水)～5月末(予定)

<会場> 西館1階ロビー(無料ゾーン)

※会期中中で会場を西館2階防災未来ギャラリー(有料ゾーン)へ移設予定です。



企画展「日本災害伝承ミュージアムマップ」会場

企画展「日本災害伝承ミュージアムマップ」AR表示



Hem21 NEWS
vol.92

令和4年3月発行

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構

〒651-0073

神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2(人と防災未来センター)

<https://www.hemri21.jp/>

当機構は、以下の組織で構成しています。

●管理部

TEL 078-262-5580

FAX 078-262-5587

●人と防災未来センター

TEL 078-262-5050

FAX 078-262-5055

●こころのケアセンター

〒651-0073

神戸市中央区脇浜海岸通1-3-2

TEL 078-200-3010

FAX 078-200-3017

●研究戦略センター

▶研究調査部

TEL 078-262-5570

FAX 078-262-5593

▶学術交流部

TEL 078-262-5713

FAX 078-262-5122

ニュースレターに関するご意見・感想を機構までお寄せください